「救い主イエスの幼少年時代」

ルカ2:40～52 p112

幼子主イエスを連れてヨセフたちは、本来ベツレヘムかエルサレムに戻る予定であったが、ガリラヤのナザレに住むことにした。主イエスがナザレ人と呼ばれる原因である。

マタイとは別にルカは、救い主であるお方がどのような人として成長されたのか記している。天地を創られた神様が完全な人となられた主イエスは、どのような姿であったのだろうか。

聖書は人間の三重性「霊と心と体」について記している(1テサロニケ5:23) 体は外部で、心は内部、その心には 知・情・意をはじめとする全ての精神生活がある。しかしそれだけではない。本来はその奥に、もう一つ、霊の世界が存在する。生まれつきのままの人間はこの霊が死んでしまっていて、神様を理解することはできない。しかし神は、主イエス・キリストの十字架の死と復活により、信じる私たちの霊を新しく生かして下さり、神を知り、礼拝し、神と親しく交わるという新創造、新世界を私たちに与えて下さったのである。

この三重性が、幼年期の主イエスの記事(ルカ2:40)に明らかにされている。ここに、みことばの真実がある。私たちは何気ない描写の中に、神が始めに創られたままの人、完全な「霊と心と体」を持つ人、第2アダム(1コリ15:47)として、幼年期の主イエスを見るのである。

またそればかりではない、驚くことに、12歳の少年の姿の主イエスの内に、すでに「自分はメシヤである」という自覚があるのを見る。主イエスはもうこの時から、やがて受ける十字架の死に向き合っておられた。

私たちは神が全力で備えられた主イエスを、知り、信じて救われ、永遠のいのちに与るという絶大な恵みを頂いている。心から主を信じ、従っていきたい。

[聖書の学び]

I、最初のアダムと同じ完全な人、キリスト (ルカ2:40,52)

1、ルカ2:40に見る幼年期のキリスト (まず、体の成長があり、内側の成長がある)

- ①「幼子は成長し」——肉体の成長
- ②「知恵に満ちて」——続いて知識・知恵の発達、心に思うこと精神の成長
- ③「神の恵みがその上にあった」——神に愛される(受け身的ではあるが霊的な成長)

2、ルカ2:52に見る少年期のキリスト (霊的、精神的、知恵の成長に体の成長が伴う)

- ①「神にいつくしまれ」——神に愛される(その霊を神が受け入れ、喜ばれている)
- ②「人にいつくしまれ」——人に愛される(神に喜ばれる人は、人にも喜ばれる)
- ③「知恵が増し加わり」——知識・知恵の発達、心に思うこと精神の成長
- ④「背丈も伸びていった」——肉体の成長

II、主イエスの12歳の出来事 (マタイ2:12~23)

- 1、毎年、主イエスの家族は律法に乗っ取って、春どこに出かけましたか。(ルカ2:41)
- 2、12歳以上は一人前の国民として数えられる特別な年、ナザレの住人たちと出かけた。一家がナザレに帰るとき、どんなことが起きたのでしょうか。(ルカ2:43~47)
 - (1)主イエスがいない事に気づいてから、見つけるのに何日かかりましたか。(ルカ2:46)
 - (2)主イエスはどこで、何をしていたのでしょうか。(ルカ2:46)
 - (3)マリアは普通の人間の子に対する親としての態度で、主イエスを叱りました。(ルカ2:48)
(マリアにも分からないほど、神でありながら、完全な人になってくださった主イエス)
 - ①「わたしが自分の父の家にいるのは当然である」(ルカ2:49)
→ この頃にはすでに、ご自分がメシヤであることの自覚を持っておられた。
 - ②「 ご存じなかったのですか… 」(ルカ2:49)
→ 主イエスはマリアやヨセフにも、やはり理解されていないのだ！という感覚を持っておられた。
- 3、救い主である主イエスは、理解されない面を受け止めながら、親の一生懸命な愛に応え、忠実に仕えられた。(ルカ2:51)

* **ディスカッション** (心を開いて話し合ってみましょう)

Q. 今日学んだことについて、思うこと、教えられたことを、分かち合いましょう。